「広島大学　欧米文化研究」第６号　1999年

FOREIGNER TALK 研究－ 今後の課題設定のために

夜　陣　素　子

0　はじめに

Foreigner Talk（以下，ＦＴ）に関しては，1971年にFergusonが初めてその言葉を用いて以来，初期は主に英語に関して，少し遅れて他の言語に関しても様々な視点から研究が為されてきた。まだ比較的新しいと言える分野ではあるが，既にかなりの調査，考察が行われてきている。その結果，個別言語におけるＦＴの特徴についてはある程度一般化できるほどに明らかになってきている。しかし，例えば言語学的に見て，母語話者が非母語話者と会話する際にほぼ無意識に行う“単純化”がユニバーサルなものなのか，それとも当該言語に特徴的なものなのかなどの，諸言語間の厳密な比較を要する研究はまだ体系的には為されていない。また，ＦＴを使用するということが社会的にどのような意味をもつのか，非母語話者の職業，出身国などによって母語話者が用いるＦＴは変化するのか，などの調査もまだ行われていない。

本論文では，ＦＴに関するこれまでの研究を振り返り，特に社会言語学的な観点から，残された課題を明らかにしていく。これは将来的に筆者自身の研究課題としていくことを目指すものである。具体的には以下の作業を中心に論を進める。はじめに，(1)ＦＴの特徴について，先行研究を基にまとめる。そして，(2)英米語やドイツ語を中心とする欧米諸言語のＦＴに関するこれまでの研究を概観し，その中に(3)日本語のＦＴに関する研究を位置づける。最後に(4)ＦＴ研究における今後の課題について，社会言語学的な視点から考察する。

1　ＦＴの特徴

ＦＴ（フォリナー・トーク）とは，ある言語の母語話者が，当該言語の能力に乏しい非母語話者と接する際に用いる話し方のことである。母語話者は非母語話者と会話する際に，コミュニケーションを成立，或いは円滑にするために，通常母語話者同士の会話では見られないような修正や調整を行う。そういった，ある特定の修正や調整を交えながらの話し方を総称してＦＴと呼んでいる[1]。その特徴には，(1)言語形式（インプット）での調整と(2)談話レベル，すなわち会話の進め方（相互交渉）における調整の二つがある[2]。Ellis（1986:133）が指摘しているように，現実の会話の中では(1)か(2)のどちらか一つの特徴のみが現れることもあれば，二つとも現れることもある。また，(1)，(2)に含まれるすべての特性が，非母語話者との会話において常に見られるわけでもない。そして，ＦＴの使用には個人差もあることを，Skoutarides（1988:118）が自らのデータを基に指摘している。つまり非母語話者に対してＦＴを多く用い

る人もいれば，ほとんど用いない人もいる。

具体的にどのような調整が行われるのか，一般的にＦＴの特徴として認められているものを上記の分類に従って挙げると次のようなものがある。

（1）言語形式の調整

発音	個々の単語や音節を明瞭に発音して，話す速度を遅くする。	
	注意深く発音する	語尾の子音に母音を付加する
	より強い強勢を置く	母音の縮約は少ない
	キーワードを強く発音する	誇張されたイントネーション
語彙	語彙数を制限する	分析的な言い替えをする
	困難な語を多用される語で代替する	ジェスチャーの使用
	代名詞の多用を避ける	数量詞，強意語，助動詞の特別な語彙
	語の反復	外国語や外国語のように響く語の使用
文法	縮約は少ない	語順変換していない疑問文が多い
	総体的に文は短い	選択疑問文が多い
	文法関係を明示する	付加疑問文が多い
	従属文よりも等位文	現在時制が多い（非現在時制に比べて）
	動詞の前置修飾が少ない	連結辞，‘it’，‘do’，動詞の屈折の削除
	主題を文の最初に置く	中間言語形式の使用（例：‘no’＋動詞）
	「Wh－疑問文」が少なく，「Yes / No 疑問文」が多い	

（2）談話レベルの調整

「具体的な内容」の話題が多い	相手が理解しているかどうか頻繁に確認する
話題を切り出す話しかけが多い	自己反復が多い
自分の理解したことが正しいか相手に確認する	短い応答文
相手の言葉を反復することが多い	

聞き取れなかったことや理解できなかったことについての説明を求める

欠如している要素を補ったり，新しい情報を付加したりして学習者の言ったことを拡張する

(Ellis 1986:135-136)

これらの特徴は欧米諸言語にほぼ共通していると言われている[3)]。しかし当然，個別言語に

特殊の文法規則に関わるＦＴの特徴もある。それらも全て考慮に入れてユニバーサルなＦＴ使用の規則があると言えるのかどうかは，冒頭で述べたように，厳密な比較分析を要するものであり，今後の研究課題であるだろう。ここではEllis（1986）がまとめたものを基にしているので英語のデータに依っているが，ドイツ語に関してはRoche（1989）やJakovidou（1993）等がまとめている。

また，日本語のＦＴに関しても，上記の特徴の非常に多くが共通している，というのが現在の知見である。Skoutarides（1988）が挙げている日本語におけるＦＴのデータの中から例をいくつか拾うと次のようなものがある。これはある日本の会社からオーストラリアに派遣されている駐在員が，オーストラリアで日本語を学んでいる学生達との会話で用いたＦＴの例である。

－はじめに選んだ言葉を別のもっと簡単な言葉に言い替える（例：ヨーロッパの諸国→ヨーロッパの国，豪州→オーストラリア）

－はじめに選んだ言葉をそれに対応する英単語に直した（例：図面→ drawing，粘土→ clay）

－はじめに選んだ言葉をより易しい表現に釈義（パラフレーズ）した。（例：高速道路→速い，高い，スピード道路）

これらは(1)の言語形式における調整に含まれる。また，この駐在員はオーストラリア人学生の日本語による質問が分からないとき，「もう一度，もう一度」と何度も聞き返した。そして自分が話している間，相手に単語や文章の意味が分かったかどうかを常に確認し続けた。

例１：学生　「かれさんすい（枯山水）にわがありますか」

駐在員「もう一度？」

学生　「かれさんすい.....にわ...」

駐在員「ああ，わかりました」

例２：「金鉱の町がありますね.....分かりますか。ゴールドラッシュの」

「燃費といいます...何キロ，一リットルで走るか...わかりましたか。」

(Skoutarides 1988:119,121)

これらは(2)の談話レベルの調整に含まれる。

しかし，日本語のＦＴにのみ見られる特徴もいくつか存在するようである。例えば，非常に詳しく，丁寧すぎると思われる表現や，一人称の多用など，日本語にしか見られない特徴が報告されている。また，敬語使用がＦＴにどのように現れるのか，という日本語に特有の課題もあり，今後の調査が待たれる。このことについては第３節で改めて述べる。

2　欧米におけるＦＴ研究

この節では，これまで様々な視点から行われてきた欧米でのＦＴ研究とその背景を紹介する。

特に英語とドイツ語を中心とした欧米諸言語に関するＦＴ研究の流れを振り返る。

欧米におけるＦＴ研究は，主に３つの視点から為されてきた。それは，ＦＴの特徴を(1)言語表現形式に焦点をあてて分析しようとするもの，(2)社会言語学的な視点から表現の機能を中心に分析するもの，そして(3)第２言語習得の分野に関連づけて考察するもの，である。これらはそれぞれが独立した分野というわけではなく，時には，研究の発端や学問的視点が複数の分野にわたっていることもある。

2.1 言語表現形式の分析に焦点をあてたＦＴ研究

はじめに述べたように，ＦＴという言葉と概念を最初に導入したのはFerguson（1971）である。彼は，会話には“普通の会話（normal speech)”と“単純化された会話（simplified speech)”があることを指摘し，特に“copula(連結辞)”に着目して諸言語における“simplicity（単純化)”に関する仮説を試みた。その中で“単純化された会話”に含まれるものとして，母親が赤ちゃんに話しかける時の母親語（Baby Talk/Motherese）やピジン言語（Pidgin）の他にＦＴを挙げ，ＦＴ研究がピジン言語化の解明にもつながりうることを示唆した。ＦＴの概念については次のように述べている。

“...the kind of ‘foreigner talk’ which is used by speakers of a language to outsiders who are felt to have very limited command of the language or no knowledge of it at all.”（ある言語の母語話者が，当該言語の能力が乏しい，或いは全くない非母語話者に対して用いる話し方）

(Ferguson1971:143)

彼は後に（Ferguson 1975)，学生達にいくつかの“普通の（母語話者同士の会話で用いるような)”文を提示し，欧米語圏以外の非母語話者に対してこれらの文を述べるときに調整をすると思うか，するとすればどのような調整を行うか，ＦＴの使用についてどう思うか，というアンケートを行った。その結果に加えて，C.S.Lewisの小説『Out of the Silent Planet』に見られるＦＴを収集し，ＦＴのシンタクスにおける特徴を，（冠詞などの）脱落，（文法的あるいは語彙的な）付け足し，言い替え（或いは，並べ替え）の３つに分けて分析した。結果を一般化するためには実際のデータが必要であることは，Ferguson自身が指摘していることであるが，彼はこの調査によって少なくともＦＴという話し方が存在すること，ＦＴに対して否定的な態度を持つ母語話者もいることなどを示唆した。Long（1983:178）が述べているように，このときFergusonが分析し，まとめたＦＴの特性は，後に実際の調査[4]によって立証，確認されている。

Stocker-Edel（1977）はFergusonの研究をふまえ，ニュージーランドのウェリントンの住民が，英語の知識が十分でない外国人によって質問された場合，どのような反応をするかを実

際に調査している。尋ねられたときの母語話者の異なる反応の仕方（身振り，非母語話者の質問を聞き返す，すぐに答える，など）を決定する要因は何なのか，非母語話者の質問の仕方，被験者（母語話者）の年齢と性別に焦点を絞り，分析している。結果，母語話者の反応は，非母語話者の質問の仕方（意味的に分かりやすいかどうか，など）に左右され，母語話者の年齢や性別による反応の相違は見られない，としている。

Long（1982）は，ＦＴでは，言語形式における調整と，談話レベルでの調整の二つが行われることに注目し，合わせて64人の母語話者と非母語話者を被験者として，彼らの会話を分析した。その際，母語話者と非母語話者の会話だけでなく，同じ母語話者が母語話者同士で交わす会話との比較も行っている。そのことにより，談話レベルの調整を明らかにすると同時に，それまで他の研究者が行った観察によるＦＴの言語形式における特徴が，実際に母語話者同士の会話よりも多く見られるものであることを確認している。

Roche（1989）と Jakovidou（1993）はドイツ語におけるＦＴを調査，分析している。Roche は，標準変種の逸脱した形と考えられがちであったＦＴにおける“単純化”を，一つの体系として捉え，ＦＴのシンタクス面での特徴を細かく分析している。その際彼は，従来の研究が少ないデータの統計結果に依拠していることを批判し，自ら86の会話を収集し，より多くのＦＴ例を記述することに努めている。また，非母語話者の用いるドイツ語の言語的特徴の中で，不明瞭な発音，ウムラウトを無視した発音，統語上わかりにくい文章構造などが，母語話者にとって，理解しがたいと判断する基準となっていることを確認している。

Jakovidou は，ドイツで働く外国人労働者とドイツ語母語話者との会話を収集し，そこに見られるＦＴを，意味論的，語用論的に分析している。また，被験者となった母語話者にアンケートを行い，ＦＴ使用の社会心理学的側面を調査している。そして，母語話者の外国人に対する姿勢や外国人と接する機会の多さが，ＦＴ使用の度合いに及ぼす影響について考察している。

2.2 社会言語学的な視点からのＦＴ研究

社会言語学的な視点からのＦＴ研究としてまず挙げられるのは，ドイツの“Gastarbeiterdeutsch（外国人労働者の用いるドイツ語）”がピジン語化しているのではないか，という論争をめぐるものである。1950年代半ばから70年代初期にかけて，ドイツ企業の労働者募集に応じて，多くの“Gastarbeiter（外国人労働者）”がトルコやギリシャからドイツに移民してきた。それと共に，外国人労働者の日常生活における言語習得と，ドイツ人と彼らとのコミュニケーションのあり方についての研究が新たなテーマとして生じた。

1976年にはスペイン，イタリアからの労働者が用いるドイツ語を調査するプロジェクトが行われた（Heidelberger Forschungsprojekt 1976）。これは労働者の言語習得の過程を追うこと

により，授業を受けた場合と受けない場合の習得過程，移民してきた時点の年齢による習得過程の相違などについて調査，考察したものである。また，1968年に M. Clyne が，“外国人労働者のドイツ語がピジン語化しつつある”と主張したのを受けて，“ドイツにおけるピジン言語の発生”についての論議も為された。しかし，他のピジン言語とドイツの外国人労働者のドイツ語には言語的に多数の類似点が見られるものの，Meisel（1975:14）やBarbour / Stevenson（1990:200）が指摘しているように，この場合はその言葉を取り巻く状況が異なっている。すなわち，ドイツ語が他の国に“輸出され”て，そこで現地の母語と混ざり合って生じた言葉ではない。また，非母語話者である外国人労働者とその家族は常に標準語に触れる機会を持つので，学習者言語が独自に発達して次世代に伝えられていく可能性は少なく，その事実も見られない。従ってピジン語とは言えないのではないか，との考えが現在は主流である。

この関連で，ドイツ人が外国人労働者に用いるＦＴと，外国人労働者のドイツ語の言語的特徴が非常に似ていることが指摘された（Meisel 1975:34-46)。そしてまず，労働者がドイツ人のＦＴをドイツ語のモデルとして模倣しているのではないか，という仮説が提出された。もしその仮説が正しければ，労働者は常に単純化されたドイツ語をインプットされ，正しいドイツ語を習得できないことになる。しかし，非母語話者はドイツ人のＦＴのみを聞いているわけではない。テレビや新聞などのメディア，或いはレストランや商店などで標準変種を耳にする機会は多い。また，両者の言語的相違点も見られる。例えば労働者のドイツ語では様々な形の動詞が一般化されて使用されるのに対し，ドイツ人のＦＴでは大抵一貫して不定形が用いられている（Barbour/Stevenson 1990:202-203)。

次に，ドイツ人のＦＴが，外国人労働者のドイツ語を模倣しているのではないか，と仮定された。しかしこの仮説も，母語話者が，流ちょうなドイツ語を話す非母語話者に対してもＦＴを用いることがある，という事実によって反論される（Meisel 1975:33)。そこでさらに，各々の言語にユニバーサルな“単純化”の規則があり，それを，母語話者はＦＴを用いる際に，そして非母語話者は外国語の習得の際に適用しているのではないか，という仮説が立てられた。この仮説は上記のような反論を考慮する必要がなく，さらに“制限された単純化”と，“精密化された単純化[5)]”の二つを含むものと修正すれば，ＦＴと学習者言語の相違点や，労働者のドイツ語のバリエーションを説明するものとなりうる（Barbour/Stebenson 1990:203)。立証はされていないが，重要視されている仮説であり，これからの研究が待たれる。

その他には，Valdman（1981）が，ＦＴの社会言語学的な要因を，文学作品に見られるＦＴを例に挙げて検証している。彼は，Robert Adams の小説『Watership Down』で登場人物が用いるＦＴの機能を検証し，小説の中で，ＦＴが外国人の言語理解にとって助けとなると同時に，母語話者がＦＴの使用によって，非母語話者との距離を保とうとする結果，非母語話者

の言語習得を妨げている，とした。そして，しばしば母語話者が非母語話者の言語使用を模倣したり，ステレオタイプ的な見方から“軽蔑的なＦＴ”を生むことがあり，それがそのコミュニティーの中で習慣化されたモデルとなって，小説などに反映される可能性があることを示唆している。また彼は，小説に見られるＦＴの分析に基づく仮説を，実際のデータによって検証する必要があることを述べている。そしてさらにＦＴの社会言語学的な面が，欧米民族中心主義の現れで有り得ることを示唆している。

2.3 第２言語習得の視点からのＦＴ研究

第２言語習得の視点からのＦＴ研究は，主にＦＴの談話レベルでの修正に目を向けることから始まった。その背景となっているのはKrashen（1985）のインプット仮説である。インプット仮説とは，学習者の現時点での言語能力をｉとすると，その能力を少し超える程度，つまりｉ＋１のインプットを学習者が理解することにより，言語能力を高めることが出来る，というものである。この視点から見ると，標準的な話し方に様々な修正や調整を行って，学習者の理解を促そうとするＦＴは，学習者の言語習得に大きな役割を担っていることになる。例えば語学教師の発話は，学習者が耳にする中でも大きな役割を担うものだが，意図的に，効果あるＦＴを取り入れていくことによって生徒の能力を高めることが出来ると考えられる。

しかしLong（1987）は，この仮説に二つの問題点を見いだし，インプット仮説を修正することを提案している[6)]。一つは母語話者が行うインプット（言語形式）の調整が，必ずしも学習者にとって理解しやすくなるものではない，ということである。時には過度に簡略化しすぎたり，説明が冗長で複雑なものになってかえって分かりにくくなることもある。二つめは，ＦＴが，学習者の理解できない語彙や文構造を取り除くことによって，学習者の理解を可能にしているのなら，どこにｉ＋１の“１”があるのか，というものである。

そこでLongは，インプットを理解可能にするには，インプットそのものにおける調整によるだけでなく，他の方法もあると考えた。それが談話レベル（相互交渉）における修正である。実際に，談話レベルにおける修正は，母語話者同士の会話よりも，非母語話者との会話に，より多く見られることが確認されている（Long 1982:, 1983)。この修正されたインプット仮説をふまえ，ＦＴ研究では，言語形式における修正だけでなく，会話の進め方，すなわち相互交渉の中に見られるＦＴの特徴を調査，分析し，第２言語習得への影響を考察するようになってきている。

3　日本語に関するＦＴ研究と今後の課題

3.1 日本語に関するＦＴ研究の歴史

これまでの日本語に関するＦＴ研究は，全て第２言語習得研究と関連づけて行われてきている。上で挙げたKrashenのインプット仮説と，それを修正したLongの説をふまえて，ＦＴが第２言語習得にとって有益であるか，教授法に活かすことは可能か，といった観点から研究が為されてきたのである。

外国語としての日本語習得に関して，ＦＴという概念を最初に取り入れた考察を行ったのはJ. V. Neustupny（1981）である。彼は，非母語話者と母語話者が会話する状況を「外国人場面」と名付け，会話者全てが母語話者である「母国語場面」とは異なった特徴を持つものとして区別した。「外国人場面」の中には，非母語話者の学習者言語としての特徴と，母語話者のＦＴとしての特徴が含まれる。その両方の特色を明らかにして，学習者に外国人場面の特徴を利用させ，最終的には非母語話者が「外国人場面」を脱出できるような方法を教授することが必要であると指摘した。その理由として，「外国人場面」にとどまっている限り，学習者はいつまでも自分の会話をモニターし，修正する，という疲労する行為をし続けなくてはならず，また，正しい日本語モデルを聞いたり使用したり出来ず，さらに“外国人”というラベルを常に貼られてしまう可能性があるから，としている。

A. Skoutarides（1981）は，実際のデータを収集し，日本語にもＦＴが存在することを初めて明らかにした。これは，言語習得過程を念頭に置いてＦＴ研究を行い，外国語教授法のあり方を考えていく目的で為されたＦＴ研究のための予備的調査である。彼は，それまでに欧米の言語においてその特徴が明らかになりつつあったＦＴが日本語にも存在するのか，あるとしたらどのような特徴があるのか，を調査するために，オーストラリアで日本語を学ぶ大学生と，ある日本企業からの駐在員達との自由な会話を録音し，分析した。結果，母語話者同士の会話では使用しないようなＦＴが確かに存在することが確認された。また，その特徴は，後に彼自身がまとめているように（Skoutarides 1988:122），欧米諸語のＦＴにおいて認められている一般的特徴とほぼ同じであった。その特徴とは，１）ゆっくりした言葉の拍子，長いポーズ，２）助詞，助動詞，動詞語尾の強調，３）文法的には正しいが，非常に短い文，４）キーとなる語や節の繰り返し，５）相手の母語を使用，６）語彙の訂正，言い替え，である。しかし，次の３つはおそらく日本語のＦＴにしか見られないのではないか，と指摘している。すなわち，簡単な文法を用いて基底構造を変形せずにそのまま表現したために，重複の多い文となったもの，非常に詳しく，少し丁寧すぎると思われる表現，日本語では普通省略される一人称代名詞の多用，である。また彼は，ＦＴは学習者の能力によって，効果的にも逆効果にもなりうることを示唆し，ＦＴの動的な性格を考慮に入れて教授法を改革していくことが必要である，と述べた。

志村（1989）はさらに，ＦＴの特徴を，言語形式での修正と，談話レベルでの修正に分け，

それぞれについて，ＦＴと，母語話者同士の会話を比較し，統計分析を行っている。その結果，言語形式の修正については，１）質，量共に単純化される，２）文法的に誤った文や未完成の文が少ない，３）（主部）・（Ｘ）・述語という日本語の基本文型が多く使われる，４）平常文より疑問文が多い，５）助詞が省略されない，談話レベルでの修正については，相手の理解をチェックする，相手の発話を修正する，といったことが多い，ということが確認されている。また，注目すべき点として，ＦＴのほうにより多くの文法的に正しい完成文が見られ，これは岡崎（1988）の「ＦＴには誤った未完成文が多く，言語習得には有害である」という主張を覆すものであることを強調している。しかしこの点については，未完成文は母語話者同士の会話でも当たり前に起こることであり，これらを「文法的でない」として学習者に聞かせるべきではない，と考えるのはどうか，という反論が為されている（高田 1992:10)。

坂本ら（1989）は，日本語のＦＴに対する学習者の反応を調査した。学習者の能力別にＦＴが含まれる文章と含まれない文章を７つテープで聞かせ，各々の文に対する好感度を５段階で評価する，というものである。結果をまとめると，初級レベルの能力を持つ学習者のＦＴに対する好感度は高く，能力が中級，上級と上がっていくにつれて好感度が低くなり，逆にＦＴの含まれない文章に対する好感度が高くなっていった。この結果を踏まえて，坂本らは，ＦＴが動的な体系であることを強調し，学習者の言語能力に応じたＦＴを含む話し方をすれば効果的な習得につながるのではないか，と述べている。ただ，高田（1992:8）も指摘しているように，この調査で用いられたＦＴを含む文章は，実際の発話ではなく，筆者達が作った人工の文であることと，初級学習者はＦＴを含む文章に対して低い好感度を示したが，それに対応する標準的な文章に対する好感度もそれほど高くはない，ということを注意しておかねばならない。

3.2 日本語のＦＴに関する先行研究の課題

以上述べてきたように，日本語にもＦＴが存在すること，また，その特徴がほぼ欧米の諸言語のＦＴと共通していることが確認されている。しかし，上で挙げた，Skoutarides（1981）が示唆した日本語特有のＦＴが，本当に日本語にのみ見られるものかどうかはまだ立証されておらず，より多くのデータによる調査が待たれる。また，Skoutarides（1988:122)，高田（1992:8）が指摘しているように，ＦＴにおける敬語の使用の実態は，社会言語学的に重要な問題であると思われるが，まだ，実際のデータによる調査は為されていない。これらの点についてさらに調査を行うことにより，日本語特有のＦＴの有無が確認されれば，これまで主に欧米のＦＴ研究で焦点となってきた，諸言語間のユニバーサルな“単純化”の法則が存在するのかどうか，という問題の解明にも貢献するだろう。

また，Krashen のインプット仮説に Long が修正を加えたものを出発点として行われている

日本語のＦＴ研究であるが，これまではＦＴの言語形式における特徴を明らかにすることに重点が置かれ，会話の進め方，特に互いの発話を聞いてそれに呼応したり，新たな修正を行ったりするかどうか，というディスコースにおける特徴については，実際のデータによる調査があまり為されていない（高田 1992:11)。第２言語習得に関連づけてＦＴを考える場合，教材やティーチャーズ・トークにＦＴを効果的に取り入れていく，ということを目的に据えているが，特に教室での教師と学習者のコミュニケーションは，教師の一方的な発話のみでは成り立たない。教師は常に学習者の発話を聞き，その発達に応じて自分の発話を修正していかなくてはならない。教授法を考えていく上で，インターアクションにおける修正についての調査も行う必要があるだろう（坂本ほか 1989:141)。

さらに，冒頭でも述べたように，日本語のＦＴの研究は全て第２言語習得の観点から行われており，従ってそのＦＴデータも，会話の相手が教室で授業を受けて日本語を学ぶ学習者であるものに限られている。一方，欧米で，特に社会言語学的な視点から行われているＦＴ研究では，会話の相手が労働者などの，授業を受けずに言語を習得している人々となっている。これらのデータを同等に比較することが出来るのかは，疑わしい。母語話者と非母語話者の社会的な関係が異なっているからである。また，非母語話者が体系的に文法を学んでいるかどうかを母語話者が知っている場合，ＦＴの特徴が変わってくる可能性もある。例えば坂本ら（1989:125）は日本語のＦＴの特徴として，「です，ます体」で話す，というものを挙げているが，この特性も非母語話者が文法を体系的に学んでいる場合，少なくとも初級レベルのうちは彼ら自身が誰にでも「です，ます体」で話すことが予想され，母語話者がそれに呼応している，とも考えられる。しかし，非母語話者が授業などで日本語を学ぶ機会を持たない場合，「です，ます体」を知らず，例えば単語の羅列のみで発話している際に，それでも母語話者が「です，ます体」を使用するかどうかは，調査の必要があるだろう。このことは，日本におけるＦＴ研究だけでなく，欧米でのＦＴ研究についても言えることである。非母語話者が目標言語を授業を通して習得している場合と，そうでない場合のＦＴの相違についてはまだ比較が為されていない。

4　ＦＴの社会言語学的側面

これまで紹介してきたように，ＦＴの特徴についてはかなり多くの調査と考察が為されてきている。しかし，明らかになってきたＦＴの特徴を一般化してしまう前に，母語話者と非母語話者の社会的な関係を基準としたＦＴの相違も調べてみる必要があるだろう。両者の社会的な力関係や，性別，年齢，親しさの度合い，非母語話者の出身地などによってＦＴの違いがあるのかどうか，このことについては，多くの研究者がその調査の必要性を述べてはいるが，実際にデータを収集し，比較分析したものはほとんど見られない。そういった調査を行い，その結

果を合わせて考慮して初めてＦＴの特徴を体系的にまとめることが出来るのではないだろうか。

その際に，第３節でも述べたように，非母語話者が目標言語に関して授業を受けているかどうか，また，そのことを会話のパートナーである母語話者が知っているかどうかを考慮することも重要であると思われる。なぜなら，第２言語習得に関するＦＴ研究で被験者となる非母語話者は，当然ながら，大抵が大学生，留学生であり，一方，社会言語学の分野でのＦＴ研究で被験者となっているのは，企業や工場で働く労働者だからである。それぞれ社会的な立場も異なり，また，一時的な滞在を目的としているか，それとも生活のために長期滞在を目的としているかによって，対する母語話者の姿勢が異なってくることも考えられる。

さらに，Skoutarides (1988:118) が指摘しているように；ＦＴには個人差がある。その個人差を考慮してもなお一般化できるＦＴの特徴はどのようなものか，より多く実際のデータを収集し，分析することが求められる。

また，外国人の居住する国やコミュニティーにおいて，多数派である母語話者と少数派である非母語話者の関係が，どのように築かれつつあるのかを知るためにもＦＴ研究は役立つだろう。上で挙げたような社会的な基準に基づいてＦＴを分析し，それを母語話者同士の会話と比較することによって，母語話者の非母語話者に対する姿勢が明らかになるのではないだろうか。母語話者と非母語話者の関係を知る別の手がかりとして，Valdman (1981) が用いたような，メディアや文学作品などの二次的データにしばしば登場するＦＴを分析する，という方法もある。これらのＦＴは実際の特徴を表していることもあるし，反対に，ポジティブなものもネガティブなものも含めて，当該の国や地域に広まっている，外国人についてのステレオタイプ的な見方であることも多い。あるいは，外国人に対する作者の姿勢を反映しているかもしれない。例えば，昨年ドイツの雑誌にのった笑い話に次のようなものがある。

外国人課を尋ねてきたトルコ人労働者に，役人が“Du Ausländer? (君，外国人？)”，“Du türkisch Landsmann? (君，トルコ人？)”，“Du nix arbeiten? (君，してないの？仕事？)”というように，連結辞を省略し，動詞を格変化させずに用いる，というＦＴで話していたのだが，実はそのトルコ人労働者は大変ドイツ語が堪能であり，書類について説明しようとした役人に，役所言葉などを交えながら非常に格調高いとも言えるドイツ語でその書類について知っていることを述べ，最後に役人は「その通りです。」と言うしかなかった，というものである (Eulenspiegel 1998/11)。これが笑い話になるということは，ドイツ人の側から見れば，大抵の人が，トルコ人労働者は片言のドイツ語を話し，上のような話し方をしないとコミュニケーションがとれない，と思っていることの現れと言えるだろう。トルコ人労働者の立場に立てば，外国人労働者と見れば誰彼となく単純化された言葉を話すドイツ人に対する皮肉ともとれる。

また，ドイツに住む外国人が書いた小説にもＦＴが出てくる。チェコ出身の Jiri Kral は，その“Supermarkt（スーパー・マーケット）”という短編の中で，スーパーで働く主人公である外国人労働者に対して，店長が“Nix lesen, putzen, putzen!（本，読まない。仕事，仕事！）”，“Du nix lesen, du arbeiten, putzen,putzen（君，読むの，ダメ。働く，仕事，仕事）”とＦＴで命令する場面を描いている。それに対して主人公は怒りを感じ，完璧なドイツ語で言い返し，また，「ドイツ語が話せないのでしたら英語で話したらいかがですか？」と英語でやり返すのである。そして，店長が自分たち従業員に話すときは常に不定形（動詞を変化させない形）を用いることに対して抗議する。店長がそう言われて困惑しているところから，悪意を持ってＦＴを使用していたのではないらしいことが推測できる。しかしこの場面により，本当の意志疎通がなく，従業員が正しいドイツ語を話せることを知らない店長，或いは知ろうともしない状況，それに対する外国人労働者の怒りを表したい作者の思いが伝わってくる。コミュニケーションを円滑にするために使用されるはずのＦＴが，逆効果になっている例であるとも言える。

このような文学作品などのＦＴを通して，現実社会の人間関係を見直すことも重要な作業であるように思われる。

5　おわりに

以上，欧米と日本におけるこれまでのＦＴ研究を振り返り，今後の研究課題について考察してきた。まとめると，言語形式だけでなく，談話レベルでのＦＴの特徴を実際のデータによって明らかにすること，各言語における単純化の法則を調査し，それがユニバーサルなものであるかどうかを確認すること，また，社会的な視点からもＦＴを分析することが残された課題である。日本では特に，社会言語学的な視点からのＦＴ研究が全く為されておらず，その必要性にもあまり目が向けられてこなかった。

近年，観光や留学，商用などの一時的滞在ではなく，職を求めて長期滞在を目的に渡日する外国人が増加している。それにつれて，移民や難民を多く受け入れているアメリカやドイツだけでなく，日本においても多文化社会という概念が広まり，異なる文化背景を持つ者同士が共に生活していく上で生じる様々な問題について論議が為されようとしている。ＦＴをはじめとする言語的ストラテジーは人々のコミュニケーションを取り持つ助けとなると同時に，母語話者と非母語話者の関係を良くも悪くも映し出す鏡となりうる。それだけに繊細なテーマにもなり得るが，その特徴を明らかにしていくことで，多くの国々の間に存在する先入観や偏見，或いはコンプレックスなどが浮き彫りになり，それらを乗り越えていくきっかけになるならば，意義があると言えるだろう。

注

1）“Foreigner Talk” という語は Ferguson（1971）が，赤ちゃんに話すときの “Baby Talk” に習って案出したものである。ドイツでは，“Foreigner Talk” とするか “Fremdenregister”（外国人に対するレジスター）とするかの定義付けに関して論議があり，現在も続いている（Dittmar 1997:21 6-218)。Roche（1989）は，レジスターと呼ぶことに異議を唱え，“Xenolekt” という言葉を使用している。また，Meisel（1975）は便宜的に “Foreigner Talk” をドイツ語に置き換えて “Ausländerdeutsch” と呼んでいる。本論文では語の定義付けに関する問題には触れず，“Foreigner Talk（ＦＴ)” という語を一貫して使用する。

2）それぞれ，英語では(1) input features, (2) interactional features（Ellis 1986）／(1) linguistic adjustments, (2) conversational adjustments（Long 1983)。訳に関しては，『ドイツ言語学事典』，坂本ら（1989）を参考にした。

3）Ellis（1986:133）によると，ＦＴの特徴については他に，Ferguson and Debose 1977; Hatch, Shapira, and Gough 1978; Long 1981a,1981b,1983a; Arthur et al.1980; Hatch 1980a らがまとめている。

4）調査者については，Long（1983:178）参照。

5）Meisel（1980）が述べたもので，ドイツ語ではそれぞれ “restriktive Vereinfachung”, “elaborative Vereinfachung”。“制限された単純化” は，時制や人称など，言語形式における単純化を意味し，“精密化された単純化” は，非母語話者が語彙を増やしたり，既知の動詞を増やすことにより，それほど複雑になることなく制限されたカテゴリーが拡張していくことを指す（Barbour/Stevenson 1990:203)。

6）Long（1987）の修正については，高田（1992:3）がまとめたものを特に参考にした。

引用・参考文献

Barbour/Stevenson 1990: Stephen Barbour/Patrick Stevenson, Variation in German. A critical approach to German sociolinguistics. Cambridge University Press.

Dittmar 1997: Norbert Dittmar, Grundlagen der Soziolinguistik. Ein Arbeitsbuch mit Aufgaben. Tübingen.

Ellis 1986: Rod Ellis, Understanding Second Language Acquisition. Oxford University Press. 『第２言語習得の基礎』，牧野高吉訳，東京：株式会社ニューカレント インターナショナル，1988.

Eulenspiegel 11/98 : Das Monatsmagazin für Satire, Humor, Nonsens plus ultra.

Ferguson 1971: Charles A. Ferguson, Absence of Copula and the Notion of Simplicity. A

Study of Normal Speech, Baby Talk, Foreigner Talk, and Pidgins. In: Hymes, D.: Pidginization and Creolization of Languages. Cambridge, 141-150.

Ferguson 1975: Charles A. Ferguson, Toward a Characterization of English Foreigner Talk. In: Anthropological Linguistics 17, 1-14.

Heidelberger Forschungsprojekt "Pidgin-Deutsch spanischer und italienischer Arbeiter in der Bundesrepublik" 1976: Untersuchungen zur Erlernung des Deutschen durch ausländische Arbeiter. Heidelberg.

Jakovidou 1993: Athanasia Jakovidou, Funktion und Variation im 'Foreigner-Talk'. Tübingen.

Kral 1983: Jiri Kral, Supermarkt. In: 'In zwei Sprachen leben' Berichte, Erzählungen, Gedichte von Ausländern, hg.von Irmgard Ackermann und Harald Weinrich. dtv.

Long 1982: Michael H. Long, Adaptation an den Lerner. In: LiLi 45/12, 100-119.

Long 1983: Michael H. Long, Linguistic and Conversational Adjustments to Non-Native Speakers. In: Studies in Second Language Acquisition 5.2, 177-193.

Meisel 1975: Jürgen M. Meisel, Ausländerdeutsch und Deutsch ausländischer Arbeiter. Zur möglichen Entstehung eines Pidgin in der BRD. In: LiLi 18, 9-53.

Neustupny 1981: ネウストプニー，J. V.「外国人の日本語の実態(1) 外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45号　30-40頁.

Roche 1989: Jörg Roche, Xenolekte. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Skoutarides 1981: スクータリデス，A.「外国人の日本語の実態(3) 日本語におけるフォリナートーク」『日本語教育』45号　53-62頁.

Skoutarides 1988: スクータリデス，A.「日本人が外国人と話すとき」『国文学解釈と鑑賞』53-1号　118-125頁.

Stocker-Edel 1977: Anna Stocker-Edel, The Responses of Wellingtonians to a Foreigner's English. In: Archivum Linguisticium 26, 13-27.

Valdman 1981: Albert Valdman, Sociolinguistic Aspects of Foreigner Talk. In: International Journal of the Sociology of Language 28, 41-52.

川島淳夫編集 1994　ドイツ言語学事典．紀伊国屋書店．東京.

坂本正/小塚操/架谷真知子/児崎秋江/稲葉みどり/原田知恵子 1989「日本語のフォリナートークに対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69号　121-146頁.

志村明彦　1989「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68号　204-215頁.

Ergebnisse und Aufgaben der Foreigner Talk-Studien : Eine zusammenfassende Darstellung

Motoko YAJIN

In der vorliegenden Arbeit wird versucht, aufgrund der zusammenfassenden Darstellung der bisherigen Forschungsergebnisse Aufgaben für die zukünftige Untersuchung von Foreigner Talk (FT) abzustecken. Nachdem die Eigenschaften von FT dargestellt werden (Abschnitt 1), wird zuerst die amerikanisch-europäische Forschungsgeschichte von FT im Umriß gegeben (Abschnitt 2) und danach geklärt, wovon die japanischen Forschungen hauptsächlich ausgehen sollten und welche Aufgaben noch erforderlich sind (Abschnitt 3). Zum Schluß (Abschnitt 4) wird auf die Notwendigkeit hingewiesen, den FT-Gebrauch unter soziologischem Gesichtspunkt zu untersuchen und zu analysieren. In dieser Arbeit wird darauf gezielt, die FT-Forschungen über verschiedene Sprachen umfassend zu überblicken und ihre Aufgaben herauszustellen.

Die amerikanisch-europäischen Forschungen von FT beschäftigen sich hauptsächlich mit drei Ebenen, nämlich mit der linguistischen, soziologischen und didaktischen Ebene. Auf der linguistischen Ebene werden die sprachlichen Eigenschaften von FT untersucht (Ferguson 1971, 1975, Stocker-Edel 1977, Long 1982, Roche 1989, Jakovidou 1993). Auf der soziologischen Ebene werden die Funktionen von FT analysiert, beispielsweise aufgrund der Untersuchung des "Gastarbeiterdeutschen" (Heidelberger Forschungsprojekt 1975, Meisel 1975). Außerdem behandelt Valdman (1981) FT in der Literatur und analysiert interkulturell zwischenmenschliche Funktionen. Im Bereich der Didaktik wird darüber nachgedacht, wie man FT für Fremdsprachenerwerb und -unterricht effektiv einsetzen kann. Dabei stützt man sich auf die Input-Hypothese von Krashen (1985) und ihre Modifizierung von Long (1987).

Die japanische FT-Forschung, die bis heute nur vom sprachdidaktischen Gesichtspunkt durchgeführt wird, zeigt viele Gemeinsamkeiten mit FTs der englischen und anderer europäischen Sprachen. Die weiteren Aufgaben bezüglich des japanischen FT liegen m.E. darin, aufgrund einer möglichst großen Datenbasis Spezifika der japanischen FT herauszuarbeiten. Darüberhinaus ist zu untersuchen, was für interaktionelle Eigenschaften FT im Japanischen besitzt. In bezug auf die Daten selbst sei bemerkt, daß man nicht nur Dialoge

in gesteuerter Spracherwerbssituation, sondern auch Daten in ungesteuerter Situation heranziehen sollte.

Zum Schluß soll mit Nachdruck darauf hingewiesen werden, daß man FT-Forschung angesichts des Heraufkommens der multikulturellen Gesellschaft in naher Zukunft auch in Japan noch stärker intensiviert soziolinguistisch durchführen sollte.